

Different Seasons

医療疫学分野専門職学位課程 片岡裕貴

はじめに

普段は日記をつけていないので、印象に基づき一年間をふり返る。同級生が読んであるあるを感じ、これから入学する人たちが読んで、なんとなくの雰囲気を理解してもらえたいことを目指すが、ゆる〜い方法でまとめられている点についてはご容赦を。

4月0日

鴨川土手や木屋町を散歩しながら花見をする。平日の昼間にこんなゆとりがあったのはいつ以来だろう、と感傷にふけた。

目に鮮やかな葉桜の季節になったころから授業が始まる。グループワークを取り入れた授業がいくつもあり、いろんな分野、いろんな年代層の同級生がいることを知る。筆者は大学卒業後6年間の臨床を経験してから入学したが、医師の同級生はその前後の年代が最頻か。同じ病院であまり話したことのなかった外科の先生がいたり、メーリングリストで名前だけは知っていた救急の先生達がいたり。

入学してから、MCRとMPHの違い、MCRの専科生と受講生の違いを知る。周りに聞いても同じことを言っている人が多かったので、これはSPHの広報の問題だろう、ということにする。

5月0日

ゴールデンウィークの直前、最初に実施しようとしていた研究が既に実施されており、現状のリソースではそれを乗り越えることは難しいということが分かり、凹む。改めて別のリサーチクエッションに基づき先人に学ぶこととした。

2週間かけて研究の概要を構造化抄録にまとめ、研究室のミーティングで発表した。「構造化」という言葉が、「穴埋め」と一緒だということに気づく。

その2週後にプロマネで発表する。前の授業の終了が遅れ、若干イライラしている雰囲気の中で発表。好意的なコメントをいただき、引き返すことにはならなさそうで、ホッとする。

6月0日

他施設に共同研究を持ちかけた返事が帰ってこず、課題研究については停滞する。その間、いろんな授業課題としてのプロトコルのひな形を多く作るようになった。

7月0日

延頸挙踵していた返事あり。面談へと進み、課題研究のプロトコル作成に移る。気づけば日中の日差しは強くなり、ずいぶんと日焼けする。英語に強いイギリス帰りの紳士にならって、通学時には慣れない帽子をかぶることとした。

研究室の納涼会でクイズ大会をするために調べもの。鴨川で見られるものは「ゆか」で山のほうに行くと「かわどこ」と名前が変わることなど、トリビアな知識が増える。当日は会計のためにお札を数えているとき、一番涼しい思いをした。

8月0日

倫理委員会にプロトコルを提出。

せっかく病院を辞めたのだから、ということで奄美大島へアルバイトに行く。1時間以上かかる転院搬送や、船を使つての訪問診療などを経験する。黒糖焼酎、濃緑の海、山は松枯れ、人は変わらない。

9月0日

キャンパスに赤とんぼが舞うようになったころにプロトコルが倫理委員会にて承認。小さな言葉の使い方や表現方法で直しがあつた。倫理委員会の方でチェックがあつた事柄についての記述研究をしていただければ、みんなが楽しめるのではないかと、思う。

10月0日

履修登録の再確認を怠つた所、年間50単位の取得上限を超えているため、複数の授業履修登録ができていません、と再確認の締め切り後に教務より連絡あり。結局、1コマは諦め、3コマは聴講という形で学ぶことに。

11月0日

御池通の並木はすっかり葉を落として冬景色。祇園で鍋をMCRの人たちと食べに行くという企画があつたが、娘の風邪でドタキャン。

プロマネの発表で、方法に対するツッコミが少なくなる。その一方で、CQそのものや、結果を社会にどう応用するかについて、上流と下流の質問が増えてくる。

12月0日

3階の演習室がいよいよ寒くなる。火曜日の川村先生の講義は1限目ということもあり、とくに寒い。みんなで上着を着て受講した。

1月0日

前期ほどではないものの、ぼつぼつとレポートを提出。JMPを大学院生である間は無料で使用できることになる。これで来年度からは統計演習でみんな楽ができそう。

2月0日

あつという間に節分も過ぎ、今シーズン最強クラスの寒気が流れこむ立春の日に稲盛ホールで課題研究発表会が粛々と執り行われる。会場がいつもの教室とは違うのと、教員勢ぞろいで独特の緊張感あり。

タイトル→背景→目的→方法→結果→考察(→外へのメッセージ)

いずれかのステップで、論理的な整合性があるかどうか、についていろんな質問が出る。基本に忠実であることが何よりも大事、という教訓を改めて得たので、来年の発表前に再度読んで臨もう。

楽しくも、あつという間の一年間であつた。